

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

I ユーモアと機知（ウィット）の本質的な相違は、機知が常に意図的であるのに対して、ユーモアは常に非意図的なことである。漱石も、ユーモアの可笑味は行雲流水の如く自然であるといったあとで、「之に反してもし人を笑わせると云う結果を予期して可笑味を演ずるならば、其の人は如何に巧妙に道化しても、道化を自覚しつつやっている。意識して、尋常にはずれた行為言語を弄するならば、其の行為言動は故意である。即ち不自然である。仮り物である。内から湧いたのではない、外から引付けたのである。私の解釈によると是がウィットである」と書いている。

II ところでニコルソンによれば、機知は目的を持っていて、批判的であり、X であり、しばしば残酷である。機知の成功の如何は、それが圧縮されており、啓示をもたらし、不意打をくわせて驚かすことにかかっている。したがって素早い、熟慮された心の働きが必要である。それはひとりでひそかに楽しみ耽けるものではなくて、聴衆を必要とする。他方、ユーモアは目的を持たず、他人を (1) ギズつけることを求めず、ただ自己を守ろうとするだけある。つまりユーモアは (2) ツルギではなくて盾なのである。それは知的、心的努力の消費を (3) トモナうどころか、却ってそのような努力を節約しようとするのである。それは不意打ちに (4) タヨるものではなく、静観的、融和的、反芻的である。それは (5) オしなくひとりひそかに楽しみ耽けるものであって、聴衆を必要としない。

III 以上のような理由から (A) ユーモア感覚は、機知や諷刺の認識よりも美学に似ていると考えられるだろう。美学のように、ユーモア感覚はいかなる特別の目的にも奉仕する限定を受けていない。その性格は限定できないものである。それはまた美学のようにきわめて直観的で、観念の論理とは全くちがった、否、それと正反對な、空想の論理をもっている。機知が想像力の産物であって、知力とスピードによって、たがいに似ていないもののなかに類似性を発見しようと努めるのとは反対に、ユーモアは空想の遊びであって、たがいに類似したもののなかに相違性を見つけようとする比較的骨の折れない認識に満足しているのである。

IV ユーモアを諷刺とアイロニー（皮肉、反語）から区別するのもまたこの目的と意図の有無である。ユーモアは本質的に受動的であって能動的ではない。ユーモアは人間の弱点を寛大に眺めて、それを矯正しようと氣に病んだりしない。だがアイロニーと諷刺はもつと高貴で教訓的な目的をもっている。アイロニーは批判的、悲観的で、現実と理想の相違を明らかにしようとするのに対して、ユーモアは、非批判的、

Y であって、現実と理想の相違を無視するか、もしくはそんなものは結局大して重要なものではないというふりをする。例えばアメリカとイギリスのユーモアの主要な相違の一つは、アメリカのそれはアイロニカルな傾向を帯び、したがって空想することによって現実を屈辱的なものと見るのに対して、イギリスのそれは、現実を魅力のある空想的なものとするほうがより氣持がよいと考えている。

V イギリス人は彼らのユーモア感覚を氣持のよい、安らかさを与える、静観的な、怠惰な、上機嫌なものと考えている。しかるに外国人にとつては、イギリス人のユーモア感覚が氣難しく、(a) 陰気なものに見えるのはどういうわけであろうか。ニコルソンはその理由の一つとして、ユーモアという言葉の語原にさかのぼり、フランスではそれが不機嫌を意味するユムールに、ドイツでは気分、空想、きまぐれを意味するラウネと混同されていたことをあげている。あのイギリスとイギリス文学に (b) 造詣の深かったテーヌでさえ、ユーモアを、「憂鬱の山の下に埋まっていた強烈な陽気さの侵入。それに予期しない想像力の閃きが加わったもの」と説明している。また『イギリスについてのノート』のなかには次のようなぎくぐりとさせられる一節がある。

VI 「（イギリス人にとつては）フランス風の機知が欠けていることは問題ではない。彼らは自家用のために特殊な種類のものを持っているのだ。それは快いものではないが、確かに独創的で力強く、風味の舌を刺して少々にがい点では、彼らのお国風の飲物に似ている。彼らはそれを《ユーモア》と呼んでいる。冗談をいっても真面目さを失わない間は、一般にユーモアはその人の面白さになっている。しかし時として (B) それは人を道化にしたり、氣取った皮肉屋にする。それは神経に強く影響を与え、記憶に永く刻みつけられることもある。それは想像力に富んだ道化の産物でもあれば、こりかたまった憤怒の産物でもある。それは人を驚かせる対照や思いがけない変装を楽しむ。狂人の風をして正氣を示し、(c) 正氣の振りをして狂氣をあらわす。イギリスで冗談をいう人間は親切であることは稀らしいし、また決して幸福ではない。彼は人生の不平等を感じて、激しく非難しているのだ。したがってこの場合のユーモアはなんの楽しみも与えてくれない。彼は心のなかで苦しみ、苛立っているからである。」

VII テーヌはまた『イギリス文学史』で次のように書いている。

VIII 「この精神の転換は、《ユーモア》—われわれはその特質を持たないので、この言葉をフランス語に訳することができない—を生む。《ユーモア》はチュートン民族、すなわち北方民族を楽しませるに充分な種類の才能である。それはビルやブランドーが彼らの味覚に合うのと全く同じように、彼らの知性に適うのである。しかし他の民族にとつてはそれは不快であり、フランス人の神経にとつてはあまりに痛烈で辛辣でありすぎる。」

IX ベルグソンもまたイングリッシュ・ヒューマールの本質についてのフランス人の誤解にある程度協力している。

X 「ユーモアはアイロニーの逆である。ユーモアもアイロニーも、ともに諷刺の一つの形であるが、アイロニーは弁舌的性質のものであり、これに反してユーモアはなにかもつと科学的なものを持っている。人は、あるべき善の觀念によつてしだいに高く引き上げるにまかせながら、アイロニーを強調することになる。したがって、アイロニーはわれわれの内部で熟せられ、いわば圧縮された雄弁となるまでにいたる。これに反してわれわれは、存在する悪の内部にしだいに低くおりていき、ますます (d) 冷静な無關心さでその特徴を記し出すことによつてユーモアを強調する。多くの人は、ユーモアが具体的な用語、技術的な細目、明確な事実を (6) 好むことに氣がついた。もしわたしの分析が正しければ、それはユーモアの偶有的な一特色ではなく、その存するところ、ユーモアの本質そのもののなのである。ユーモア作家は、ここでは学者に変装するモラリスト、なにかわれわれを不快にする目的だけで解剖をする解剖学者のようなものである。そして、われわれがここで取り上げている限定された意味でのユーモアは、たしかに道徳的なものの科学的なものへの一つの移調なのだ。」

XI イギリス人のユーモア感覚を人好きのする、満ち足りた性質のものと考えている人々にとつては、これらの判断は苛酷な、まちがったものに見えるかもしれない。しかしテーヌがイギリス人のユーモア感覚のなかにはあざけりとまじめさの特殊な組み合わせがあり、それは知的な反応よりもむしろ神経的な反応を示し、思いがけない偽態を(7)装い、イギリス土着のもので、強い想像力をもち、時として道化や子供っぽいものに墮落すると書いたのは確かに正しかったのである。

XII またイギリス人のユーモア感覚の重要な構成要素であるナンセンスに対する愛好は、「狂人の風をして正気を示し、正気の振りをして狂気をあらわす」ことに等しいことを否定するものはほとんどあるまい。

XIII しかしテーヌやベルグソンが、イギリス人のユーモア感覚は科学的な、もしくは現実的な要素をもち、その調子は憂鬱で、味はにがく、親切であることは稀で、決して幸福でなく、人生の不平等に対する鬱積した(8)憤りにもとづいていると明言するときには、多くの人々は彼らが誤解にとらわれていると主張するにちがいない。そしてイギリス人のユーモア感覚についてのフランス人とイギリス人とのあいだの見解の(9)矛盾を説明するために、テーヌはイギリス文学の一学徒にすぎず、彼の説は十七、八世紀に存在していたユーモア感覚には適用されるが、近代の軽妙なそれには当てはまらず、甘美で単純な現代のユモリストを知らないのだといつて反駁することであろう。しかし彼の定義はイギリスの労働者階級の(9)瘦せたタイプのユーモア、つまり時として「下町の」ユーモアとか、「冷笑的な」ユーモアと呼ばれるものにはびつたり当てはまるのである。このタイプのユーモアは確かに自己満足的でも、逃避的でも、また口あたりのよいものでもない。それは現実的で、懐疑的で、シニカル(冷笑的)で、(10)怒りを含み、しばしばいせつである。その調子も意図もどちらも辛辣で苛酷である。ニコルソンはこの種の「冷酷なユーモア」をむしろイギリスのプロレタリア階級のアイロニーと呼んだほうがよいのではないかと書いている。

(河盛好蔵『エスプリとユーモア』(一九六九)による)

注 ニコルソン……Harold Nicolson イギリスの外交官、政治家、歴史家、文芸批評家(一八八六～一九六八)

道化る……意識的にこつけないことをする。おどける。ふざける。

テーヌ……Hippolyte Alolphe Taine フランスの哲学者、批評家、文学史家(一八二八～一八九三)

チュートン民族……古代、ユトランド半島にいたゲルマン人の一部族。

ベルグソン……Henri-Louis Bergson フランスの哲学者(一八五九～一九四一)

偶有……ある性質などを偶然に備えること。

問一 傍線部(1)～(5)の片仮名の部分を漢字に直し、解答用紙の所定の欄に記せ。

問二 傍線部(6)～(10)の漢字の読みを平仮名(現代かなづかい)で解答用紙の所定の欄に記せ。

問三 波線部(a)～(e)それぞれの語の意味として最も適切なものをイ～ホのなかから一つずつ選び、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。ただし同じ記号を二度以上用いてはならない。

イ いつものとおりに間違いない精神状態

ロ 落ち着いて、その場の感情に走らないさま

ハ ふさぎこんで晴ればれしないさま

ニ つじつまが合わないこと

ホ 知識が深く、すぐれていること

問四 空欄 X・Y それぞれに入る最も適切な語句を、次のイ～ホの中から一つ選んで、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。

X イ 屈辱的

ロ 攻撃的

ハ 消極的

ニ 潜在的

ホ 逃避的

Y イ 競争的

ロ 積極的

ハ 先鋭的

ニ 暴力的

ホ 楽観的

問五 問題文全体を、①イギリスにおけるユーモアについて説明した部分、②それに対する外国人による誤解の理由を考察した部分に区切るとすれば、②の段落はどこから始まるか。その段落をⅠ～XIIIの番号を用いて解答用紙の所定の欄に記せ。

問六 傍線部(A)「ユーモア感覚は、機知や諷刺の認識よりも美学に似ている」とあるが、その理由をⅢ段落の内容を利用し、解答用紙の所定の欄に記せ。なお解答は「ユーモア感覚は」にはじまり、「……から。」という理由を述べる形で終わるようにせよ。(六十文字以内、句読点も一字に数える)

問七 傍線部(B)「それは人を道化にしたり、氣取った皮肉屋にする」とあるが、その意味として最も適切なものをイへの中から選び、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。

- イ ユーモアは、イギリス人を、道化にしたり、氣取った皮肉屋にする。
- ロ ユーモアは、フランス人を、道化にしたり、氣取った皮肉屋にする。
- ハ アイロニーは、イギリス人を、道化にしたり、氣取った皮肉屋にする。
- ニ アイロニーは、フランス人を、道化にしたり、氣取った皮肉屋にする。
- ホ フランス風の機知は、イギリス人を、道化にしたり、氣取った皮肉屋にする。
- ヘ フランス風の機知は、フランス人を、道化にしたり、氣取った皮肉屋にする。

問八 次のイへの中から本文中に述べられていることと一致しないものを一つ選んで、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。

- イ ユーモアと機知(ウィット)の本質的な相違は、機知が常に意図的であるのに対して、ユーモアは常に非意図的なことである。
- ロ ニコルソンは、イギリス人のユーモアを外国人が誤解している理由について、フランスでは不機嫌を意味するユムールに、ドイツでは気分、空想、きまぐれを意味するラウネに、それぞれ混同されていたことをあげた。
- ハ テーヌは、ユーモアについて、イギリス以外の他の民族にとつては不快であり、フランス人の神経にとつてはあまりに痛烈で辛辣でありすぎると述べている。
- ニ ベルグソンによれば、アイロニーとユーモアとはともに諷刺の一つの形であるが、アイロニーがわれわれの内部で熱せられて、いわば圧縮された雄弁となるのに対して、ユーモアは、ますます冷静な無関心さでその特徴を記し出す。
- ホ イギリス人のユーモア感覚のなかにはあざけりとまじめさの特殊な組み合わせがあり、それは知的な反応よりもむしろ神経的な反応を示し、時として道化や子供っぽいものに墮落するなど、テーヌが書いたのは誤解にとらわれたものであった。
- ヘ イギリス人のユーモア感覚についてテーヌの定義するところは、イギリスの労働者階級の痩せたタイプのユーモア、つまり時として「下町の」ユーモアとか、「冷笑的な」ユーモアと呼ばれるものにはよく当てはまる。

問九 次のA・B二つの話は、一方がユーモア、他方がウィットの例として伝えられているものである。いずれをユーモアの例、またいずれをウィットの例と考えるか。さらに、その理由についても、解答用紙の所定の欄に記せ。(二百字以内、句読点も一字に数える)

- A ある政治家が首相のとき、議会で一人の女性議員に噛みつかれ、「もしわたしがあなたの場合(けんあ)だったら、あなたの紅茶のなかに毒を入れたい」と罵られたのに対して、彼は静かに、「もしわたしがあなたのお連れ(つれ)だったら、よろこんでその紅茶を飲むでしょう」と答えた。
- B ある伯爵がサロンでみんなの退屈な会話を聞いているとき、ついうとうとした。それを見た一人の紳士が、かたわらの婦人に向かって、「寝かしておいてあげましょう……おしゃべりをやめて」というと、彼は片目をあけて、「いやご遠慮なく。おしゃべりをやめられると、僕は目が覚めてしまいます」と答えた。



問七

□

問八

101

問九

[illegible]

二〇〇字

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——